

特殊な病気の一卵性双生児 高度な治療で無事出産

川崎医大付属病院 きょう退院

川崎医科大付属病院(倉敷市松島)が、胎盤を共有する一卵性双生児に起こる特殊な病気のレーザー手術を導入し、最初に治療を受けた女性が無事出産した。高度な技術を要するため、治療できる施設は国内で10カ所、中国四国地方では唯一とい

病気は一卵性双生児の1割程度に起こるという「双胎間輸血症候群」。一つの胎盤につながる血管を通じ、片方の胎児(供血児)の血液がもう一方の胎児(受血児)に取られる格好で血流バランスが崩れ、供血児は発育不全、受血児は心不全などを発症。重症化すると死亡するケースがある。国内では年間25

0人程度の妊婦が発症するとされる。手術は「胎児鏡下胎盤吻合血管レーザー凝固術」と呼ばれ、妊娠16週から28週未満の妊婦が対象。母体に小さな穴を開け、専用の内視鏡を挿入して2人の血液が行き来する血管をレーザーで焼き固め

る。2012年から保険適用となった。退院する女性は里庄町、公務員馬場友里子さん(28)。妊娠18週で手術を受け、同37週の今月8日に双子の女児を帝王切開で出産した。「病気や手術のリスクを知って不安もあったが、手術を終え、羊水に浮かぶ赤ちゃんをカメラ越しに見た時はほっとした」と振り返り、「これからの生活についてあれこれ考えられることが幸せ」と話した。

1月から30例以上を実に5例で成功した。担当する村田晋・産婦人科医長は「手術が成功すれば胎児の救命率は格段に上がる。岡山の交通アクセスのよさを生かし、中国から広く患者さんを受け入れた」としている。

伊丹友香



難度の高い手術を乗り越え、生まれた双子の女児を抱く馬場さん(右)と村田医師

県内では、川崎医科大付属川崎病院(岡山市北区中山下)で14年